

過去の作品制作における自己表現の分析

後編（第3種～第5種）

伊藤 昭博

An Analysis of the Self-Expression in My Artworks (2)

Akihiro ITOH

はじめに（序論）

1988年の私の初個展（東京都 神田 田村画廊）での作品発表以来、今年で20年目になる。これまでに個展、グループ展を東京や福岡の画廊、ギャラリーで開催し、野外での展覧会や熊本県小国町での滞在型公開制作の展覧会（Artists Camp in Aso）を企画し、同時に制作と作品展示を行ってきた。今回の研究紀要では、過去20年間に制作、発表した作品について写真を記載しながら、展覧会の内容を説明し、更に作品制作における自己表現の分析をしていくことにする。これまでの発表した作品について、客観的に自己の表現を分析することで、作者自身の制作における思考のプロセスを明らかにすることが可能であると考えられる。

これまでの私の展覧会の活動内容は、次の5種に分類することができる。

第1種は、武蔵野美術大学共通絵画研究室助手時代に東京の画廊、ギャラリーで開催した個展、また、同大学資料図書館での助手によるグループ展（武蔵野美術大学助手作品展 ACT）

第2種は、別府大学に赴任後、福岡の野外スペースでの招待出品、商業施設での公募企画

展、福岡天神のギャラリーでの個展、長崎端島（軍艦島）でのグループ展

第3種は、熊本県小国町の様々な地域を会場に日本や韓国、インドの作家たちが滞在しながら制作を行った公開制作型のグループ展（Artists Camp in ASO）

第4種は、熊本県小国町宮原地区を会場とした小国美術倶楽部主催のワークショップを取り入れた企画展覧会

第5種は東京のアパートの一室を会場にした展覧会と神奈川県三浦半島において全国の画廊、ギャラリーの選抜した作家が参加した野外グループ展、福岡県田川市の商店街でのワークショップ、「場」をテーマにした大分での展覧会である。

第1種、第2種の〔前編〕は昨年の研究紀要（『別府大学短期大学部紀要』第28号）において報告させてもらった。今回は第3種～第5種を〔後編〕とし、展覧会の内容について報告し、自己表現の分析を行いたい。

第3種 熊本県小国町での公開制作型展覧会 Artists Camp in Aso での活動

nap

平成7年10月3日～9日 熊本県阿蘇郡小国町の遊水峡においてアーティスト キャンプ イン アソ 実行委員会が主催する公開制作形の展覧会に日本各地より10名の美術作家が参加し、制作、展示を行った。作者は紡錘形の立体作品を会場の木に吊し、また、古木を加工した立体作品を川の中に設置した。



サイズ 2500mm×500mm×400mm
素材 木、炭
場所 遊水峡(熊本 小国)

*このアーティストキャンプでは約10日間、熊本県の遊水峡というオートキャンプ場に滞在し、共同生活をしながら、作品制作を行っていった。作品制作のための材料を探すことから始まり、作品の設置場所も同時に決定していく。伐採された丸太をいかに私なりの形にしていくかが重要である。丸太の切断面の角はチェーンソーで削ぎ落としながら、木と対話していくように形態を作り出していった。私の場合、一本の木から生まれる形は紡錘形になってしまうようである。また、完成した作品を川沿いの杉の木に吊すことで、糞虫や鳥の巣、蜂の巣のように木に寄生することで生命体を維持していくものたちに近付こうとしたのかもしれない。

WANA

平成9年10月10日～19日 熊本県阿蘇郡小国町上城池の鶴地区においてアーティスト キャンプ イン アソ実行委員会が主催する公開制作型の展覧会が開催された。日本、韓国、インドより17名の美術作家、音楽家が参加し、制作、展示、ライブなどを行った。作者は、3mの長さの竹を割ったもので紡錘形の形体をつくり、それに風糸を網目模様に巻いた作品を制作し、会場の木に吊り下げた。この展覧会の模様は読売新聞に掲載された。



サイズ 3400mm×1000mm×1000mm
素材 竹、風糸
場所 熊本県阿蘇郡小国町上城池の鶴地区

*このアーティストキャンプでは、竹を素材に線を組み合わせることでできる紡錘形の形を作り出した。作品は神社隣の木に吊すことで成立する。吊された紡錘形の作品が時間の経過の中で、どのように変化していき、周りの風景と一体化していくのか興味があった。私の言っている風景とは目に見えるものだけでなく、自分が立っている場所で感じる風であったり、温度、湿度、また、鳥のさえずりや川のせせらぎ等の音であったりする。作品が真の意味において風景の一部に成りうることは、前述のことが、作品自体と響き合った時に初めて見る側に感知できるのではないだろうか。

The earth trip

平成10年8月1日～10日 熊本県阿蘇郡小国町の北里地区においてアーティスト キャンプ イン アソ実行委員会が主催する公開制作型の展覧会が開催され、日本、韓国、アメリカより11名の美術作家及び音楽家が参加し制作、展示、ライブなどを行った。作者の作品は、土に長方形の穴を掘り、そこに違う土地の色粘土を埋め込み、焼いた作品を展示した。この展覧会の模様は読売新聞に掲載された。



サイズ 1200mm×750mm×480mm
素 材 土、色粘土、炭
場 所 熊本県阿蘇郡小国町北里 北里大社境内

*このアーティストキャンプのテーマは「たたく」であった。この展覧会の図録に記載したコメントには「神社の土俵の脇に四角い穴を掘り、山で見つけてきた色の付いた粘土を埋めて叩き鳴らしていく。生まれの違うもの同士がぶつかり混じり合う音が聞こえてきた。」と私自身記している。長い年月の時の中で生き物たちは動き、生きる場所を見つけ、そこで生活を営んできた。互いに違うもの同士が混じり同化していくことで新たな生命が生まれ、生き物たちは進化していく。

Mantaroh Seijin

平成11年9月12日～22日 熊本県阿蘇郡小国町の万成小学校においてアーティスト キャンプ イン アソ実行委員会が主催する公開制作型の展覧会に日本、韓国より13名の美術作家が参加し、制作、展示、ワークショップなどを行った。作者は発泡トレイを素材にして5mほどにつなげた作品を制作し、それを学内のプールに浮かべ、校舎の上から鑑賞できるような展示を行った。



サイズ 5000mm×1200mm×200mm
素 材 発泡トレイ、ガムテープ、スプレーペイント
場 所 熊本県阿蘇郡小国町 万成小学校

*無機質の発泡トレイがつながりプールの水面で風により動くことで、まるで天に舞う竜のように、いろんな形に変化した。風の力、水の力等の自然の力は動く生命体を創り出す。私とワークショップに参加した子どもたちは、校舎の4階からプールに浮かぶ発泡トレイの生命体を眺め、小国杉の緑に囲まれた小国の風景を実感した。何日か経ったある日、この時期には、珍しくない台風がやってきた。プールに浮かんだ発泡トレイの生命体は、いつしか小国の空に消えてしまった。

小国ドリーム

平成12年11月3日～12日 熊本県阿蘇郡小国町の西里小学校においてアーティスト キャンプ イン アソ実行委員会が主催する公開制作型の展覧会に日本各地より9名の美術作家が参加し、制作、展示、ワークショップを行った。作者はゴムボートの上に取り付けることのできる竹製の骨組みに障子紙を貼り込んだドーム型のオブジェを制作し、その中に鑑賞者を乗せプールに浮かんでもらった。



サイズ 1200mm×2000mm×1000mm
素 材 竹、障子紙、ゴムボート
場 所 熊本県阿蘇郡小国町 西里小学校

*このアーティストキャンプでは上記に述べたドーム内で障子紙に映る光や陰、水のゆらぎ、周りのいろんな音等を体感してもらう試みであった。水に揺れるドーム内では周りの風景は見えないため、日常感じている地上でのバランス感は失われてしまう。心地よさなのか船酔いなのか何とも言えないこれまでに体感したことのない空間に身をゆだねてみるのも有意義な時間であった。

第4種 熊本県小国町宮原地区で小国美術倶楽部を発足し、企画展示と関連ワークショップを開催

空の箱

平成15年3月21日～30日 熊本県阿蘇郡小国町宮原の宮原一番街において小国美術倶楽部が主催、企画した展覧会「センチメンタルジャージー」に大分、熊本在住の3名の美術作家が参加。著者は、宮原地区を流れる静川の川沿いに廃材、杉板で小屋を制作し、鑑賞者に小屋の内部から外の風景を体感してもらった。この展覧会の模様は熊本日日新聞に掲載された。



サイズ 1850mm×2100mm×1300mm
素 材 廃材、杉板、ガラス、鏡、OHPシートに写真プリント
場 所 熊本県阿蘇郡小国町宮原 宮原一番街

*小屋を一種の箱と捉え、箱の外側と内側を行き来する行為は自らの視線が移動していくことである。小屋の中から外の風景を見ることは、体は箱の中で包まれた状態で視線が外に意識されているため小屋の中の匂いや周りの気配を感じながら外の風景を見ていることになる。小屋の中でなければ特に視線は限定されないが、ここでは開口部から見える風景はそこにいる人の記憶として残っていくことになる。私の作品と人が関わることにより、そこでの風景は創り出されていることを実感できるのである。

ミステリーサークル

平成16年3月21日～28日 熊本県阿蘇郡小国町において小国美術倶楽部が主催、企画した展覧会「小国オープン」に大分、熊本在住の3名の美術作家が参加。著者は小国町宮原の綿屋旅館の入り口広間において、鑑賞者が覗けるような箱を制作、箱の中にはテレビモニターを設置し、現実と映像の世界の異空間的な表現を試みた。また、ミステリーサークルと題し、小国町の木魂館のテニスコートにおいてテニス大会を開催し試合終了後、参加者にブラシでコート整備をしてもらった。この時にブラシの跡の砂模様様がコート上に残り、これをミステリーサークルと題し、参加者に鑑賞してもらった。



サイズ 470mm×460mm×1000mm
素 材 合板、トレーシングペーパー、テレビモニタービデオデッキ、ビデオテープ
場 所 熊本県阿蘇郡小国町宮原 綿屋旅館

*ミステリーサークルと題した、この試みはテニスの練習後、コート整備をする際にできた砂の模様が正にミステリーサークルに見えたことから、テニス大会の参加者に同じ体験をしてもらうことで無意識にできる「美」を発見してもらうものであった。人は何気ない日常の中にこのような「美」の発見をすることで日常の生活を楽しめるように思う。

小国色のタコ

平成16年3月21日～28日 熊本県阿蘇郡小国町において小国美術倶楽部が主催、企画した展覧会「小国オープン」に大分、熊本在住の3名の美術作家が参加。著者は小国町宮原の宮原小学校において地元の子どもたちとワークショップを開催。100個の連凧を目標に色とりどりの凧の制作を行った。完成後、会場の子どもたちと一緒に連凧を揚げた。



サイズ 270mm×1300mm×10000mm
素 材 ビニールシート、竹ひご、アクリル絵具、紙テープ、凧糸
場 所 熊本県阿蘇郡小国町 宮原小学校グラウンド

*このワークショップは「小国色のタコ」と題し、子どもたちに好きな色で絵を描いてもらい、小国の空に連凧を全員で協力して揚げることで創り出される空の風景を体感してもらう試みであった。凧は最初のうちは風もなく、あまりうまく揚がることができなかったが、子どもたちは一生懸命走ったり、わいわい言いながら揚げるコツを覚え凧は大空に舞い上がった。この時、子どもたちは何を見たのだろうか？ここで見た小国の空の記憶は、いつまでも子どもたちの心に残っていてほしいと思う。

「もしも小国で、、、」

平成17年3月20日～27日 熊本県阿蘇郡小国町において小国美術倶楽部が主催、企画した展覧会「もしも小国で、、、」に全国から約50名の美術作家が参加。これは、過去12年間小国町で開催された Artists Camp in Aso と小国美術倶楽部の企画展示に参加した作家に「もしも小国で、、、」と題して、小国町で今後、実施したいプラン等をイメージスケッチや文字により表現してもらい、それらを小国町のギャラリー「あみだ杉の館」において一堂に展示した。



サイズ 450mm×580mm
素材 プリント用紙 (パソコンにより出力)
場所 熊本県阿蘇郡小国町 あみだ杉の館

*小国という場所は、各地から訪れた作家から見ると、非日常的な特別な空間である。ある期間そこでの生活と創作活動は、その作家にとっても、私にとっても、刺激的で有意義な時間であったと確信している。その後、各々の作家は日々の活動において、何らかの変化を得たのであろうか？時間が経ったからこそ、客観的に今の自分たちに想像できる世界があると思う。この企画が、これからの小国の町創りのヒントになればとの思いであった。

連風ワークショップ

平成18年3月、熊本県阿蘇郡小国町の ゆうステーションとケヤキ広場において小国美術倶楽部が主催、企画した展覧会で連風作りのワークショップを開催した。この連風ワークショップは訪れた人々に風を制作してもらい、それらを繋げて、小国の空に色鮮やかな連風を舞い揚げさせ、ケヤキ広場から見える小国の風景を意識化してもらう試みであった。



サイズ 1300mm×250mm×30000mm
素材 パーチメント紙、竹ひご、紙テープ、風糸
場所 熊本県小国町 ゆうステーション、ケヤキ広場

*参加者には、こちらで用意した5色のパーチメント紙と竹ひご、紙テープで風を制作してもらい、最終的に参加者全員の風を繋げ、約30枚の連風をけやき広場で風揚げを行った。風があまり吹いてなかったこともあり、空高く揚げることはできなかったが、けやき広場のけやきの木の隙間から見える青空に色鮮やかな連風の飛ぶ風景を見ることができた。このことは、風と人々が小国の風景に溶け込んだ一時であったと実感している。

風の記憶

平成19年3月 熊本県阿蘇郡小国町のあみだ杉の館において小国美術倶楽部が主催、企画した展覧会で作品を展示した。会場には小国美術倶楽部の企画メンバー5人の作品が展示され、会期中2回のスライドレクチャーを開催した。作品は、「風の記憶」と題し、宝仙短大のワークショップで行った連風の制作と葛西臨海公園の海岸での風揚げの模様を写した写真を木の箱を組み合わせた空間の中で展示した。

えないものがある。この展覧会では、私が、風作りを通して関わった学生たちと過ごした、夏の風景を記憶の断片として見てもらった。



サイズ 2100mm×2500mm×2100mm

素材 杉板、トレーシングペーパー、インクジェットプリント

場所 熊本県阿蘇郡小国町 あみだ杉の館

*過去の出来事の写真を箱の中に入れて展示することで、特別な時間の記憶を表現しようとした。また、箱を組み合わせで作った空間は、所々、箱に貼られた半透明のトレーシングペーパーで見えない構造になっている。鑑賞者は箱でできた空間の外側と内側を行き来することで、配置された写真と現実の世界を体感することになる。人の記憶というものは、時間が過ぎてしまうと、色あせた写真のように曖昧な状態になっていく。場合によっては、消えていくこともあるかもしれない。現実にあった事柄が、時間の経過の中で夢のような出来事として記憶に残っていくこともあるだろう。現実の時は過ぎて行くのに、身の周りには、見えるもの、見

第5種 東京のアパートの一室を会場にした展覧会と神奈川県三浦半島において全国の画廊、ギャラリーの選抜した作家が参加した野外グループ展、福岡県田川市の商店街でのワークショップ、「場」をテーマにした大分での展覧会

My Body's Borderline

平成8年8月16日～24日 東京都中野区のアパートの一室においてAIA (Art in Apartment)の主催する展覧会を開催した。この展覧会は5名の美術作家がギャラリー方式で会場に作品を展示した。作者は、東京より車で出発し、山梨県、静岡県に流れる富士川沿いに南下し、太平洋岸の漂流物や鉄製品の廃材などを収集しながら東京へ戻り、その時の記録写真と車で廻ったルートの地図を作品化したもの、また、収集物にマスキングテープで覆い被せた作品を会場に設置した。



サイズ 2700mm×2700mm×2700mm
素材 流木、廃材、マスキングテープ、写真
場所 東京都中野区第2本郷マンション106号室

*収集物をマスキングテープで覆い被せる行為は、かつて、使われていたものたちを私が旅をしていく過程で拾い集めて、別の物質(作品)として変化させることで、そのもの自体が生き物のような存在にさせることであったように思う。また、旅の途中で見た風景と時間をこの展示で表現しようと試みた。拾う行為は、ものとの出会いである。それは偶然な出来事かもしれないが、宇宙空間の出来事と考えると必然なのかもしれない。単にものは、物質でしかないが、関わった人により過去の思い出になったり、その時の情景につながる大切な宝物でもある。

「場」というカフェ

平成12年12月16日～平成13年1月7日 神奈川県三浦半島において全国のギャラリー、画廊より推薦された美術作家約100名が参加した展覧会。作者は、三浦海岸駅京急グランド跡地において廃材により5～6人程の鑑賞者が入れるような建物の構造的な空間の作品を制作した。作品内部より外の世界(風景)を日常と異なる視線で体感できる構造になっている。この展覧会の模様は読売新聞に掲載された。

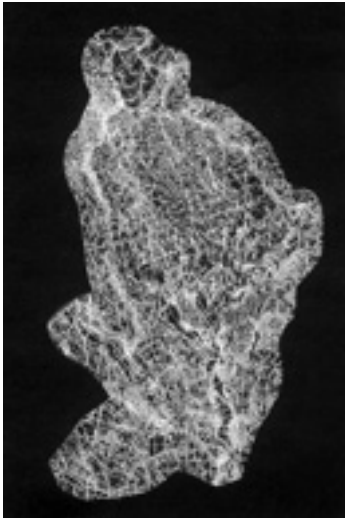


サイズ 3600mm×3600mm×3600mm
素材 廃材、ボルト
場所 神奈川県三浦海岸駅京急グランド跡地

*ほとんどの建築物は、木材や鉄筋の骨組がベースになっている。子どもの頃から建築中の骨組みには興味があった。縦、横、斜めの直線が周りの風景と響き合い、日常と違う光景に心がワクワクしたものである。大工さんが、昼時に建築中の柱だけの家の中で弁当を食べたり、休憩時にお茶を飲んでる様子を見て、何か憧れのようなものを感じた。この展覧会では、かつて建物の構造体としての柱(廃材)を、表現材料に、私なりの構造物を制作し、その空間の中で、来てもらった人々にコーヒーを飲んでもらいながら、周りの風景も味合ってもらった。

空の行方

平成14年7月 風景意匠アートプロジェクトが企画したポスター展に九州在住の美術作家15名が参加した。作者は熊本県旭志村の地図を表現材料として大気汚染による空の未来をテーマにポスターを制作した。



サイズ 600mm×480mm
素材 地図、トレーシングペーパー、写真印刷用紙
場所 熊本県熊本市上通りパビリオン

* 地図自体をパソコンにスキャナーで取り込み、白黒を反転させ、夜の空のイメージで制作を行った。反転した黒い色面に浮かび上がる白い等高線は夜空に描き出されたオーロラの様のように見えた。その上にトレーシングペーパーを部分的に貼り、汚染された雲により星が見えにくくなっている状況を表現した。

Trays blocks

福岡県田川市の伊田駅商店街において小学生の子どもたちを対象としたワークショップでスーパーでもらった発泡トレイにペンキで着彩したものを組み合わせて立体のオブジェを共同で制作し、田川市美術館に展示した。



サイズ 1300mm×1300mm×1300mm
素材 発泡トレイ、ペンキ
場所 福岡県田川市伊田駅商店街及び田川市美術館

* スーパーマーケットでもらった発泡トレイに切り込みを入れ、切り込み部分を組み合わせることで立体的な表現が可能である。このワークショップは発泡トレイを組み合わせるという単純な作業の連続であるが、積み木やレゴのようにパーツを取ったり付けたりしながら、イメージを創り上げていくプロセスが重要である。

「場」という BAR－空想の森美術館編－

平成12年5月13日～6月28日 大分県湯布院
空想の森美術館において黒岳山麓美術会議が主催する「ホッペ展」に大分在住の美術家8名が参加し、展覧会を開催した。作者は廃材により移動式の屋台を制作し黒岳の風景写真や展覧会プランのドローイングを展示した。



サイズ 1850mm×1800mm×1300mm
素材 廃材、キャスター瓶、写真ドローイング
場所 大分県湯布院 空想の森美術館

*「場」という BAR の屋台は、私と参加者、または、参加者同士のコミュニケーションを展開させていくための「場」を創り出す装置である。この屋台で私は参加者に注文してもらったカクテルを作り、飲んでもらうことで、黒岳の風景写真や展示プランのドローイングを媒体にしてコミュニケーションをはかっていった。

「場」という BAR－オアシスひろば編－

平成12年12月 大分市のオアシスひろば21 アトリウムプラザにおいて大分在住の二宮圭一氏が企画した「村出現」という展覧会に参加した。作者は廃材でできた巨大建造物の一角に屋台を制作し、鑑賞者とコミュニケーションをとれるような「場」を実験的に創った。

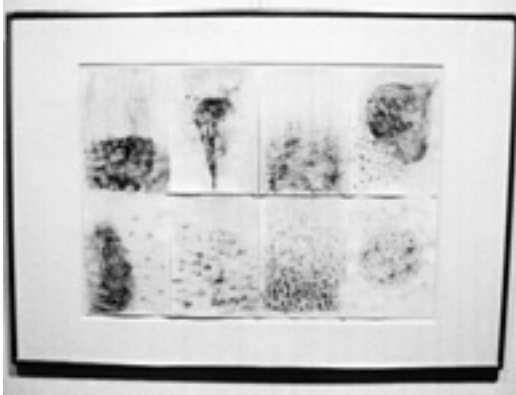


サイズ 1800mm×1950mm×1500mm
素材 廃材、写真、カレンダー、瓶
場所 大分県大分市 オアシスひろば21

*「場」という BAR の第2段は大分のオアシスひろばで開催した。「場」のもつ力は、その時々場所であったり、集まる人々によって違いがある。人同士がコミュニケーションをとる場合、この「場」の力というものが大きく左右する。「場」という BAR を、どのような空間にしていくかは私なりの演出力が問題になってくるが、参加者とのコミュニケーションで共に創り出していく共同作品である。

雨の行方

平成16年12月5日～11日 大分県大分市のオアシスひろば21 県民ギャラリーにおいて武蔵野美術大学校友会大分支部の主催する美術展に作品を出品した。作品は日常的にドローイングしていたものを一枚のパネルに貼り展示した。

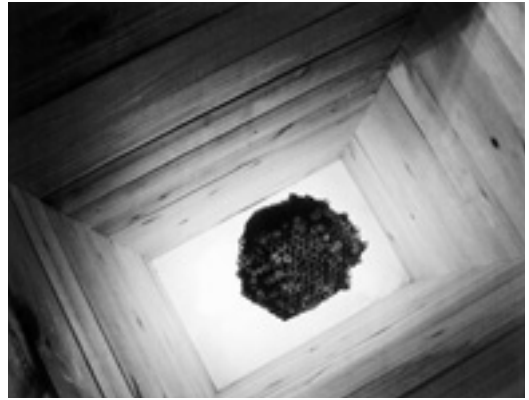


サイズ 900mm×650mm
素材 水彩紙、青インクペン
場所 大分市 オアシスひろば21県民ギャラリー

*ドローイングは作品を制作するというよりは、日常的に考えていることなどを日記のように記録していくことだと考えている。基本的に人に見せるというよりも自分の中で思考を廻らす行為である。日々ドローイングされたものは実際に作品を制作する上で重要なヒントになる場合が多い。今回制作したドローイングは雨や風といった自然界の出来事と私の時間をテーマに青インクの線を滲ませる表現方法で描いたものである。

空の上の蜂の巣

平成16年12月5日～11日 大分県大分市のオアシスひろば21 県民ギャラリーにおいて武蔵野美術大学校友会大分支部の主催する美術展に作品を出品した。作品は杉板を箱型に組み立てたものの中に青い空の写真を OHP シートにプリントしたものを配置し、その上のガラス板上に蜂の巣を設置した。箱の中を覗くと青い空を背景に蜂の巣が宙に浮かんだようにみえる展示になった。



サイズ 450mm×300mm×1100mm
素材 杉板、蜂の巣、OHP シート、板ガラス、トレーシングペーパー
場所 大分市オアシスひろば21県民ギャラリー

*蜂の巣と箱は以前から興味を抱いていた。蜂の巣は自然界の中で蜂たちが作り出す造形物であり、蜂たちの生命を宿す家である。箱もまた、人間界の家に例えると人々の生命を宿し、育む空間と捉えることができる。生き物たちは、単体ではなく、外敵から身を守るために、生きるための空間を長い時間をかけて創り上げてきた。その象徴的な存在として、蜂の巣を箱の中に浮かび上がらせた。

まとめと考察

第3種に述べた熊本県小国町でのアーティストキャンプでの経験は、それまで私の捉えていた美術ではない小国という地だからこそできた表現行為であり、自分が出会った場所といかに関わって、そこの風景を創り出していけるのかといった実験的な「場」でもあったように思う。その時間の中で様々な風景や人々と出会い、私の表現形態も少しずつ変化してきた。昨年の紀要の「前編」で述べた作品の表現方法は一本の木を外側から削り、木の塊を思わせるものが主であったが、発表を重ねるに連れ、木の外側と内側から自分のイメージするフォルムを探り出し、それらを組み合わせでできた形態（種や脱け殻を思わせる形）に移行してきた。更に第5回目のアーティストキャンプでは表現素材に竹を使用し、線の組み合わせにより紡錘形の形態を木に吊すことで、周りの風景と線のフォルムでつくり出される風景を意識した作品となった。ここでは秋の約1ヶ月ほどの展示期間の中で木に吊された作品は風に揺れ、回ったりすることで、陽の光を浴び、うつろいながら、周りのものと同化した風景になった。また、私が表現する作品が、塊から殻そして線へ変化してきた要因の一つは展示空間の違いが揚げられる。塊の作品の場合、重さもあることから、床に置くという行為は自然であるが、線の組み合わせの作品の場合、重量は軽くなるので、木や天井に吊すことは可能になってくる。とはいえ、私にとって、あるものが、その場所に置かれることに違和感があることも事実である。海の漂流物は波に揺られ、時に、どこかの浜辺にたどり着き、また新たな波に乗って旅をしていく。動いていくことで周りの風景は変化し、そのもの自体も進化し続けるのである。作品を吊す行為も、周りの状況の中で、その場所にいながら、変化し続け、風景を創り出すことのような気がする。そして、これまでの作品の多くは、木や竹といった自然素材を表現材料として、ある期間、風景の一部となって、ある

時は何かの巣のように、またある時は何かの脱け殻のように作品を展示した。自然界の生き物たちの巣や脱け殻は、どれも形に無理がない。私は、生き物たちが作り出す、美しく不思議なフォルムに魅了され、そこに近付こうとしているのかもしれない。生き物たちにとっては巣や脱け殻は、生きていく上で必要なものであり、生きるという過程で本能的にその生き物たちの遺伝子に組み込まれている行為の結果作り出されるアートなのかもしれない。私が作品を創り出す行為は意図的であり、生き物たちのアートには到底およびもしないが、人という生き物としてアートの必然性を探っているように思う。

(参考文献)

- Artists Camp in Aso vol. 3 「木」1995
アーティスト キャンプ イン アソ実行委員会
Artists Camp in Aso vol. 5 「土」1997
アーティスト キャンプ イン アソ実行委員会
Artists Camp in Aso vol. 6 「たたく」1998
アーティスト キャンプ イン アソ実行委員会
Artists Camp in Aso vol. 7 「包む」1999
アーティスト キャンプ イン アソ実行委員会
Artists Camp in Aso vol. 8 「光と闇」2000
アーティスト キャンプ イン アソ実行委員会
小国美術倶楽部企画展示「センチメンタルジャージー」
2003 小国美術倶楽部
小国美術倶楽部企画展示「小国オープン」2004
小国美術倶楽部